

CABINETS

アッシュダウンはヘッドアンプだけでなく、低音を余裕のパワーで出力するキャビネットにも定評がある。これらは、搭載するスピーカー・ユニットや、筐体の構造により3種類に分類されている。そのなかで自分に合ったタイプを選択したい。

Klystron cabinet



バスレフポートを採用した筐体のキャビネット・シリーズ。ネオジュウム・カスタム・メイド・スピーカーユニットを搭載し、クリアで深みのあるサウンドを作り出す。15インチ・スピーカーを1発とホーンを搭載したNeo115などもラインナップ。

Neo410H ¥231,000

- スピーカー：10インチ×4+ツイーター
- 入力：800W RMS (8Ω)
- サイズ/重量：610 (W)×730 (H)×420 (D) mm / 37kg

ABM cabinet



スピーカーユニットはアッシュダウンが独自に開発したブルーライン・カスタム・メイド・スピーカーユニットを搭載したABMシリーズのキャビネット。ここで紹介する810タイプのほかにも、15インチ・スピーカー1発を搭載したABM115などをラインナップ。

ABM 410T ¥84,000

- スピーカー：10インチ×4+ツイーター
- 入力：800W RMS (4Ω)
- サイズ/重量：609 (W)×671 (H)×420 (D) mm / 39kg

MAG cabinet



アッシュダウン、オリジナルのブルーライン・スピーカーユニットを搭載したMAGシリーズ・キャビネット。こちらにも搭載するスピーカーによりさまざまな種類がある。

MAG 210T DEEP ¥50,400

- スピーカー：10インチ×2+ツイーター
- 入力：200W RMS (8Ω)
- サイズ/重量：604 (W)×468 (H)×420 (D) mm / 約 19kg

MINI STACK AMPLIFIER



60Wのヘッドアンプと10インチのスピーカーを搭載したキャビネットを2台組み合わせた、小型スタック・タイプのアンプ。VUメーターはもちろん搭載。練習用として自宅でもアッシュダウンのサウンドを気軽に楽しめる。

Perfect Ten MiniRig ¥52,500

- ヘッド部出力：60W RMS
- ヘッド部：445 (W)×170 (H)×230 (D) mm ●重量：6.8kg
- キャビ部(ひとつにつき)：445 (W)×390 (H)×260 (D) mm ●重量：10.6kg

EFFECT PEDALS

アンプの開発で得たノウハウをもとに、アッシュダウンが開発したエフェクト・シリーズ。同社のトレードマークであるVUメーターは全機種に搭載、堅牢な筐体を共通とし、ベース・サウンドに味つけを加える。



Bass Chorus Plus ¥18,900



Bass Drive Plus ¥18,900



Bass Dual Band Compression ¥18,900



Bass Envelope Filter ¥18,900



Bass Sub-Octave Plus ¥18,900

Chorus Plus=フランジャーの効果など幅広い音作りが可能なコーラス。
Drive Plus=原音とのミックス量を調整できるベース用ディストーション。
Dual Band Compression=ふたつの帯域に分けてかけられるコンプレッサー。
Envelope Filter=フワ効果に加えツマミを駆使することで細かな設定が可能なフィルター。
Sub-Octave Plus=歪みを加えることもできるオクターバー。

CD収録音源について

本企画はCD付録音源に対応しており、新製品として急ぎよ試奏したLittle Giant 1000を除き、各モデルごとにふたつのトラックを収録した。

●1番目のトラック

Track36=クライストロン500

Track38=MK500 head

Track40=MAG 600H EVO II head

以上では、アッシュダウンのヘッドアンプが誇るクリアな音色を知るため、アンプのトーン・コントロールをすべてフラットにした状態で録音した。

●2番目のトラック

Track37=クライストロン500

Track39=MK500 head

Track41=MAG 600H EVO II head

Track42=Little Giant 1000

2番目のトラックでは、各アンプのトーン・コントロールを活用し、試奏を行なった佐藤が提案するセッティングで収録。1番目のトラックと聴き比べてみると、劇的な音色変化というよりも、あくまでベース本体の持ち味を生かした、より深みのあるベース・サウンドを作り出せることがわかるだろう。

なお、録音方法についてはあらかじめ佐藤が弾いたフレーズをラインで録音し、それをアンプに入力するリアンプという手法を用いた。これにより、プレイの差による音色変化を防ぎ、すべて同じ条件のなかで、アンプの個性を知ることができる。



今回、佐藤が用いたのは、66年製と思われるフェンダー・プレジジョン・ベース。普段からメインとして使用しているものだ。

THE BASS INSTRUMENTS 2

Ashdown Engineering